

EPO2018.1月・27日(土)大阪国際会議場<中之島>/・28日(日)大阪府社会福祉会館<谷町>

# こころでわかる支援者エンパワメントセミナー

“知的(発達)障害のある人の「支援と関係性」を考える-支援に関わる人たちはどう生きるのか”

今、支援者としての当事者性を確立するときではないだろうか。それは障害当事者の主体性とも密接につながっている。相模原殺傷事件から1年余り、地域で生きる営みや関係をもとに紡いでいく支援に関わる人たちはどう生きるのか。知的(発達)障害者の生と支援者の生をクロスさせて「支援と関係性」を考えます。明けて2018年1月開催。ご参加を!

講師:浜田寿美男(立命館大学特別招聘教授・奈良女子大学名誉教授)/村瀬学(同志社女子大学生生活科学部特任教授)/高岡健(岐阜県立希望が丘こども医療福祉センター児童精神科部長/発達精神医学研究所長)/渡邊琢(日本自立生活センター介護コーディネーター/ヒューマンファースト京都支援者)/安積遊歩(ピアカウンセラー)/安積宇宙(オタゴ大学)/対論者:山田剛司,梁瀬亜希子,尾埜健二,尾川知(支援現場)

1日目プログラム 1月27日(土)大阪国際会議場(グランキューブ大阪)/会議室1009		
9:50~	オリエンテーション	EPO
①講義	□「私」がいまここでこうしていることの不思議	浜田 寿美男
②講義	□支援者と介護者は、どこがどう違っていると考えれば良いのか-「なにもしないこと」と「相模原事件」の間に立ちながら。	村瀬 学
—昼休憩—		
③講義&対論	□支援者たちはどう生きるのか-支援者の葛藤、痛み、人生について * 支援者と対論	渡邊 琢 山田剛司 & 梁瀬亜希子
④講義&対論 ~16:50	□健常者に近づくと翻弄された10代~ピアウンセリングへの道へ-今、大切なのは支援者たちとの痛みと絶望の分かち合い。 * 支援者と対論	安積 遊歩 尾埜健二 & 尾川知
2日目プログラム 1月28日(日) 大阪府社会福祉会館/会議室301		
9:40~	オリエンテーション	EPO
①講義	□〈世界〉へ向かう時、〈世界〉から降りる時	高岡 健
②講義&対談	□「124cm からみた世界—車イスで生まれてきてよかった」 * 親子対談	安積 宇宙 安積 遊歩
—昼休憩— 支援者たちの“こころでわかる5分間メッセージ(相模原殺傷事件へ)”		
③事例研究	◇報告 その1:愛称で呼ばないと怒るSさんと、愛称で呼べない、呼びたくない支援者。その2:重度の知的障害(小頭症)Bさん兄弟の一人暮らしを支える。	えんぴつの家 パーソナルひらかた
④フォーラム &トークの場 ~16:50	◇フォーラム (事例報告・対論を受けて) “私たちはどう生きるのか-「支援と関係性」を考える” * トークの場 質疑応答 & まとめ (講師陣&参加者)	村瀬学/高岡健 渡邊琢/安積遊歩 浜田寿美男

■期日会場 2018年1月27日(土)大阪国際会議場(北区中之島)/28日(日)大阪府社会福祉会館(中央区谷町)の2日間

■受講対象 知的(発達)障害者の支援にかかわる方、並びに本テーマに関心のある方(福祉・教育・保育・相談・行政・司法・医療・大学の各機関・現場等) ■受講料 10,000円/2日間(資料代込み) ■定員なり次第締切(申込書は裏面へ)

■申込先(EPO) FAX:06-6320-6068 メール:npoepeo@nifty.com

「当事者研究」という言い方が世に広まってきたのは、北海道の「べてるの家」の取り組みからだったろうか。それまで医療や介護の「対象者」でしかないかのように思われてきた人たちが、自ら自分たちのことを語り、従来の「対象者研究」を当事者による「当事者研究」へと切り換えたのである。しかし、そして切り換えられたとき、その当事者たちを介護する立場の人たちは、それまで通り単なる「介護者」にとどまったのだろうか。「介護者」とは、ただ「介護」を仕事にしている「者」ではない。介護者だって、立派にそれぞれの人生を生きる「当事者」ではないか。いや、世の中に「当事者」でない人など、どこにもいない。そう考えたとき、私たちは自らの人生の「当事者」として、この介護の生業をどのように生きてきたのか。そして、これからどう生きていくのか。あらためて考えてみよう。(EPOセミナー長・浜田寿美男)

■主催:障害者と支援者をつなぐ-エンパワメント・プランニング協会(EPO)



氏名			男・女 (20・30・40・50・60歳代以上)
住所	〒(自宅・職場)		
連絡先 (自宅・ 職場)	電話番号		FAX
	メールアドレス		
自己紹介 (所属団体・ 職業・活動 etc.)			

\* お問い合わせ: TEL 06-6324-1133(EPO) \* 申込締切り: 定員になり次第 (1日のみの特別参加は、ご連絡ください)

-----<講師からのメッセージ>-----

<p>◆&lt;「私」がいまここでこうしていることの不思議&gt; 浜田 寿美男 私は71歳になりました。と言っても、この71年という時間は、外から当てて計った暦上の時間でしかありません。その最初の数年間は「私」という自覚もなく、ただ生み出されたままにこの「世界」に生きていました。そして、じつは、いまも「私」を自覚するのはほんの瞬時、多くはマッハの自画像のように、「世界」を前にして「私」はいつも空白です。ですから、ふと自分に気づいたとき、「私」がいまここでこうしていること不思議を感じてしまいます。この感覚は、おそらく誰にもあると思うのですが、それに気づいて、「そうなんだ」と口にして表現することはあまりありません。おそらく「世界」のことで忙しすぎるのです。「意思疎通のできない人間には生きる価値はない」と言ってたくさんの人たちを殺傷してしまった人がいましたが、「意思疎通」とは一方だけで成り立つものではなくて、つねに相互的なものです。相手のことを「意思疎通のできない人間」と言ったとたん、じつは、自身もまたその相手に対して「意思疎通のできない人間」となっているのです。彼もまた「世界」のことで忙しすぎたのでしょうか。——今回はこんなことを考えてみたいと思います。(「マッハの自画像」は当日、スライドで見てもらいます)</p> <p>◆&lt;支援者と介護者は、どこがどう違っていると考えれば良いのか—「なにもしないこと」と「相模原事件」の間に立ちながら&gt; 村瀬 学 「支援」という言葉が広く使われるようになり、ふと分からなくなることがあります。とくに「陰りのない言葉」として重宝されてきたところが気になっています。養護学校が、支援学校や支援学級になっていたときは、それでいいと思ったものでした。でも、国連の平和維持活動(PKO)で「後方支援」だから大丈夫、というように「本物の戦闘」には関わらない立場を「支援」といったり、少女売春を援助交際と表現される頃から、「支援」や「援助」ならいいではないか、というニュアンスも出てきています。でも、当事者に関わる人には「介護者や介助者」という呼び方があります。支援、援助、介助、介護…学問的には区別が立てられているのですが私にはピンとくる理解が得られていません。気になるのは、相模原事件を起こした彼が、もしかかりに「介護者」の仕事だけしていれば、「あのような事件」を起こしたのだろうかとなぜか思っています。つまり「介護者」から「支援者」になろうと努力していなければ起こらなかったのだろうか…彼の「衆議院議長宛の手紙」では「国のために・家族のために」に「支援」するつもりで「犯行」に及ぶのだという趣旨のことが書かれていたのですから。彼は「現場＝介護」を離れて見る「支援」の視線を模索してしまっていたのか？…</p> <p>◆&lt;&lt;世界&gt;へ向かう時、&lt;世界&gt;から降りる時&gt; 高岡 健—①障害者施設での経験を生かし、特別支援学校の教員を目指しています。</p>	<p>た。」「②(もともと教員志望だった)はい。以前はそうでしたが、その後、これは自分にできることではないなと思い、あきらめました。(津久井やまゆり園に勤めようと思ったのは)仕事も楽し、良い職場だと思って受けました。」——いずれも相模原殺傷事件の植松聖による言葉です。</p> <p>②の延長上には、事件は起きなかったはず。むしろ、彼は、①を捨てきれなかったがゆえに、事件を惹起してしまったのではないのでしょうか。こう問いかけてみることは、翻って、〈わたし〉にとっての仕事≡〈世界〉への向かい方と、仕事≡〈世界〉からの降り方の考察に、つながっていくはず。</p> <p>◆&lt;支援者たちはどう生きるのか—支援者の葛藤、痛み、人生について&gt; 渡邊 琢—支援者や介助者は、なにかあったとしてもあまり感情的に反応することなく、ある程度感情をコントロールしながら仕事していると思います。でも、実際の支援現場(介助現場)に入っていると、いろんなことを思うと思います。これってこのままではいいのだろうか。なんかきついこと言われたけどガマンしてないといけないうのかな。ちょっと今日は身体がしんどいけど、なんとか笑ってすごさないといけな、などなど。障害者福祉の理念と現実との間のギャップに悩むこともあると思います。支援に振り回される自分の日常、あるいは逆に、日々ほとんど変わらず何かが積みあがっていく感覚のない日常、そうした日常から逃れたいと思うこともあるかもしれません。そうした気持ちはふだんガマンして押し殺していると思います。でも押し殺し続けると、いつか自分がコワレてしまいそうになります。ふだんは言えないそうした気持ちを取り上げて、そこから新たに障害者との関わりや自分の生き方などを捉えなおしていけるようなことを話せられたら、と思います。</p> <p>◆&lt;健常者に近づけ！と翻弄された10代～ピアウンセリングの道へ。今、大切なのは支援者たちとの痛みと絶望の分かち合い&gt; 安積 遊歩—自分の身体が受ける差別と不条理に翻弄されることを19歳の時に反転し、この社会にその葛藤を返そうと行動し続けてきた。その中で、ときに支援者は私の反逆の意志を常に身近に受け止めてくれた。差別されたくないという強烈な主張は、重い障害を持つ仲間たちと出会うなかで、自分の中にある差別者性、加害者性に気づく鏡ともなっていた。最前線で私の「差別するな」という叫びを聞き続けてくれた支援者たちは、その時点で共に社会を問い、その絶望と痛みを分かち合ってくれる仲間となった。支援者となるということは、自分の中にある差別者としての絶望の痛みにまず気づくことである。共に生きることを目指して命は継承し続ける、その中に立ち現れる優生思想からくる絶望を分かち合う支援者となってほしい。</p>
--	---

\* アクセス ● 1月27日(土)大阪国際会議場 1009 会議室：北区中之島 5-3-51 ☎06-4803-5555・京阪電中之島線「中之島(大阪国際会議場)駅」(2番出口)すぐ・JR大阪環状線「福島駅」徒歩15分・JR東西線「新福島駅」(3番出口)徒歩10分・阪神本線「福島駅」(3番出口)徒歩10分・地下鉄「阿波座駅」(中央線1号出口・千日前線9号出口)徒歩15分。  
● 1月28日(日)大阪府社会福祉会館 301 会議室：中央区谷町 7-4-15 ☎06-6762-5681・地下鉄「谷町6丁目駅」(谷町線4番出口・長堀鶴見緑地線)4番出口徒歩5分。/地下鉄「谷町9丁目駅」(谷町線、千日前線2番出口)徒歩10分。